

慶応義塾大学 唐手研究会 望月 康彦 著

昭和29卒

松涛館創設時よりの歴史を現代に残し、その資史を書き残されている。大先輩、慶応75周年史等の編集にも携られ、現代日本の空手会の草分けともなる、先生の論評・論旨です。私の考え方が間違い出で無かったと立証されておられます。関西三田会会長・関西学連審査員(私の空手学学問の先生)安東 浩介先輩の先輩

慶応の空手部は、日本の空手会の原点と言っても過言ではない。

この様な先生方とお会いできる事が、大学の空手部に身を置いた一人として幸せと感じます。

正和館 師範 関西学連 監査部会 藤村 正二郎 中京大学44年卒

はじめに 正和館 師範より一言。

道場生に伝える。

この慶応大学OBの望月先輩の論評より松涛館流・現在の試合制度の歴史を学び、自己の稽古の過程としな

私自身再度空手と言う、スポーツの歴史観を勉強しなおします。先人の作り上げた、歴史の上に君達が居る。

空手のみならず、学業もしっかり。礼節・克己心・独立自尊等、全てに於いて、書き込まれている。

この先生の論評を真正面から受け、理解し、学んで貰いたい。

望月先生及び慶応大学空手部の特別な許可を貰い正和館HPに掲載する事が出来ました。

道場生ならず、松涛館流同門関係者・和道流同門関係者・高空連・学連関係者にぜひ読んでもらいたいもの

正和館 代表 師範 藤村

松涛館

大正11年、(1922)当時沖縄尚武会会長であられた、富名腰 義珍師 が東京で行った**第一回体育博覧会**(展覧会という人もいる)に招かれ、沖縄出身の一ツ橋大学学生の儀間真謹氏と演武を行ったが、新聞にも取り上げられず反応は大変小さかったと言う。そこで沖縄出身で松村 宗棍師の弟子でもあった**男爵の伊江朝直氏が講道館の嘉納治五郎師に依頼して再度演武会を東京女子師範学校の講堂で催し役人、軍人、警察等関係者も多く集まり、柔道は嘉納師の他、永岡十段、西郷四郎六段(後の小説姿三四郎)他で総勢300人を集めて演武会を行い大きな反響を呼んだという。これは私自身が後に船越師範(字を改めた)に何度も伺った。先生は稽古の帰り文教のお宅迄、部員が交代でお送りする折、決まって宮城(皇居)と講道館前で電車の中からハットを取って軽くお辞儀をされた。嘉納師に対する恩義を屢々語っておられた。**

船越師のことを知った**慶應大学のドイツ語の粕谷真洋教授**は直ちに弟子入りして、**大正13年10月15日**学校の認可を得て船越師を師範として迎え入れ**本州初の学校に於ける唐手研究会を創部**したのである。

実に粕谷教授はご家庭一体となって部と部員の面倒を見られた。部員募集の為に当時では珍しい映画を、部員を役者にして、悪者を空手で退治するなどのストーリーで造ったりされた。今、青山墓地に眠って居られ

船越師範はいつもマントにハットなどおしゃれであった。私ども部員がお宅までお送りした当時、既に80才になられていたが腰もしっかりされ、そして風格とゆとりがあり、女性の話もお嫌いではなかった。

尚、最近まで学校に於ける空手部は慶應が最も古いとの言い伝えがあったが、昭和17年卒のOB松崎さんからお借りした沖縄の最長老長嶺将真師の著書によると「明治三十八年、四月沖縄県立第一中学校、那覇市立商業学校、及び沖縄県師範学校に唐手部設置、これと前後して県立農林学校、県立工業学校、県立水産学校等にもまた設置さる。」とある。一方唐手部としてではなく学校の教課としてのものは部とは別に教課として書かれているのでやはり此処に書かれた部は我々の認識する部と同様のものと解釈せざるをえない。とすれば我々が従来認識していた世界、若しくは日本初の唐手部の認識は本州初、に訂正しなければならぬ余りこだわることはないかもしれぬが、やはり慶應としては間違いは訂正する必要がある。

慶應創部の翌年の大正14年に東大(当時東京帝国大学)が、続いて、一高、そして順序不詳ながら学習院、

一橋、次いで、昭和5年に拓殖、6年早稲田、9年に法政が創部し、それらを門下とされた。

しかしその後、やはり先生の門下であった大塚博紀師が自ら創られた転位、転体、転技の技等をもとに和道を開かれて独立し、以後東大は和道流となった。

全日本空手道連盟の組織と松涛同門会

突然時代が一足飛びに飛んで、全日本空手道連盟(以後、全空連)の事となるのは、いささか唐突ではあるが、松涛同門会が出来、船越先生の記念碑を鎌倉円覚寺に建立したことを書く筋みちとしてこれも空手の歴史のひとつまとして残して置くべきと思う。

昭和41年春伊藤(俊)、高木(房)さんに呼び出されて私がパレスホテルに行くと「松涛一門の会を作りたい」とのお話だった。

「それぞれの団体には話しをしておくから後は望月が連絡窓口となってまとめるように」とのことであった。

その時の話しを要約すると、既に昭和39年に設立されていた全日本空手道連盟は、その当時の組織は現在と同様日本全国を都、道、府、県の連盟として全空連の統率のもと各自、地区連盟で運営してゆくものであったが、当時の構成団体は全日本学生空手道連盟、全日本実業団空手道連盟、全国自衛隊空手道連盟(後に実業団連盟と合体)とそれに4大流派、即ち松涛館、剛柔流、糸東流、和道流をそれぞれ代表する各1団体の合わせて7団体によるものであったと記憶している。更に後に佐々木氏の主宰する全国空手道連盟が加わったのではなかったかと思う。

そして松涛館を代表する上記の1団体が、昭和32年4月10日文部省が認可した社団法人日本空手協会(以後協会)であつた。(その後、協会は昭和50年11月全空連を脱退、6年後の昭和56年全空連に再び復帰し、全空連組織変更後の松涛館代表として全空連各流派後援団体の一つとなる。又、これとは別に平成2年、協会の一協会を割って出て、社団法人登記簿謄本事件をおこし、裁判となり東京地裁、東京高裁における協会の全面勝訴を経て平成11年6月最高裁に於て却下されたことにより協会が全面勝訴で終結している。)

さて、慶應は昭和22年の空手協会設立と同時に小幡、伊藤、高木さんは勿論重要な立場で、又、高木、望月、鈴木(博)が技術指導員として登録され、岩本さんも稽古に参加していたが、33年か34年に慶應は全面的に手引くこととなり、その結果として、即ち慶應が協会から離れたことにより上記の全空連の組織には直接の関係絶たれることとなっていた。それ故に上記の伊藤、高木両先輩のお考えは、松涛同門会を設立してこれを全空連に日本空手協会以外のもう一つの松涛館を代表する団体として認可させ、それによって慶應、早稲田、法政その他が全空連に正式に加わってゆくとする将来を見据えた計画であった。

しかし、結局これは全空連が、もし松涛館に2団体を認めることとなれば、今まで1流派1団体で整理されていけものが他流派からも複数団体の全空連加盟の希望が殺到して乱立する結果を招き運営上収集がつかなくなるとして強く拒否し実現にいたらなかった。之に対し更に伊藤さんとしては、空手に他の武道種目を加えて団体を造り全空連に加わろうと考えられたか或はその検討を試みたか今となっては分からないが、少ししてパレスホテルに塩田剛三氏を食事に招き、拓大OBの福井さんも同席され私もご一緒することとなった。

その後の塩田師に武道の連合会を創立することを申し入れその場で塩田氏の基本合意があつたようであつた。結局空手道連盟各自の運営を全空連が統括しておこなわれているが、競技団体として全日本学生空手道連盟、全日本実業団空手道連盟、全国高等学校体育連盟空手道部、全国中学校空手道連盟、協力団体として全日本空手道連盟剛柔会、全日本空手道連盟糸東会、(社)日本空手協会、全日本空手道連合会、全日本空手道連盟錬武会、全日本空手道連盟和道会から成っている。

後に、松涛同門会が世界の門下一同の募金による浄財で鎌倉円覚寺に建立した船越先生の記念碑に昭和以来30余年、門下各校並びに日本空手協会が毎年4月29日に円覚寺に集いお参りを続けている。又、上記和道流四校も当初はご長老が寄付にも加わり出席していた。

尚当時、円覚寺の管長は朝比奈宗源師であり、慶應OBとのご縁があり、山本(孝)さんと記念碑建立のお願うかがったところふたつ返事で無償で土地をご提供くださった。記念碑には最も教育的内容を今尚我々に残す「空手に先手なし」の琉球時代からの戒めを朝比奈管長の筆で見事に蹟していただいた。又、大先生の人と

なりについて、早稲田大学の浜信泉元総長より船越先生の碑文を頂戴した。

大浜先生は沖縄県のご出身で、早稲田大学教授として初代空手部長にご就任され戦後も永く部長にあられ早大空手の精神的、知的、支柱として育てあげられた。そして初代全日本学生空手道連盟、並びに初代全空会長として空手界の基礎を固め、社会的信頼を築かれた。その功績は極めて大であった。

正和館 館長 談、

※文中の松濤館同門会が別のかたちで(公財)全日本空手道連盟の協力団体として平成26年7月に認可され(公社)日本空手協会と、全空連との間で天皇、皇后杯の申請にたんを発し、裁判沙汰になり、全空連より協除名処分を通達される。日本空手協会に代わり、(一財)全日本空手道 松濤館 (会長 笹川 全空連会長) 26年5月発足、同年7月に全空連協力団体として認可される。

(一財)全日本空手道 松濤館は、上記松濤館同門会と同じ趣旨を持つ、団体である。

正和館は平成26年8月15日を以て、50年に及ぶ日本空手協会 堺支部を閉じ、新たに同上の構成団体の一松濤空手道会 (会長 津山捷泰 全空連 副会長)に大阪 松濤空手道会として入会承認され、同年よりその歴史の第一歩を歩み出す。

諸行事 (試合制度の誕生)

その時代に空手部を守り通した大勢の先輩方の御苦労が誠に忍ばれる。やがて、敗戦直後の混乱から時代次第に立ち直りを見せ、我々も戦前、戦中のあの空手部の黄金時代の華をもう一度我々の手で、を夢に青春掛けての心意気が次第に部員達皆の胸に満ちていった。その間多くの先輩方が我々に戦前、戦中の空手部旨に胸を沸き立たせる、そしてしみいるような話を聞かせて下さり我々をひっぱってくださいましたことは忘れられない。高木さん、湯沢さん、村田さん、堀江さんその他の方々であった。

そして、20年代から30年代にかけて、以前には及ばずともそれに近い時代が出来ていったのである。

一時、占領下にあった日本は(過去の歴史上の比較で見た場合、最もと言えるほど友好的な占領政策であったと私は考えている。但し、沖縄を始めとする基地周辺の方々はどれほど苦痛を長く味わって居られるか私達にはならないと思う。連合軍総司令部(GHQ)から学校に於ける武道を禁止された。若い日本人の敵愾心、復讐心の復活を避ける為であった。柔道、剣道がその対象となったが空手は稽古を継続していた。しかし、いつ改めて空手が総司令部の目に留まり、禁止されるかの恐れがあり道場の窓の外に全て板を巡らせて外見えぬ様にして風だけは通して稽古を続けていた。あらためて今昔の感がある。昭和20年11月島谷英郎部長ご就任、温厚なお人柄で45年まで実に25年の永きに亘りご面倒を頂戴した。常に紳士的で落ち着いた変わらご対応が今なお印象にはっきり残っている。

22年、戦後第一回の合宿を山中湖へ、当時の事情から食料の調達に幹部は大変御苦労されたことと容易に想像される。11月3日戦後第一回秋季大会が三田山上の歴史的に由緒高い、現在、国の重要文化財である演説館で行われた。小幡さんが戦後始めて空手にお顔をだされ印象的であった。進級試験の審査をいただき

20年代末迄は2月3日福沢先生のご命日は朝早く、目黒駅に集合して先生のお墓参りに行かないと寒稽古皆勤にならなかった。

24年、進駐軍に接收されていた日吉校舎が接收解除され、それまで開かれていなかった日吉授業が再開と同時に稽古も再開された。当初は校舎の屋上が稽古場だった。又、大学の授業は進駐軍の俗に言う、かまほ兵舎を使い、放課後はそれを道場とした。

試合制度の誕生

27年の夏も終わろうという頃、突然早稲田の大島主将、小森副将以下何人かが綱町道場に現れた。

「今までの交歓稽古は、全く礼節もなく、私学の永い伝統を持つ早慶両校が続けてゆくべきものではないと思つては早稲田で試合形式のルールを造ったのでそれでやってみてはいかが」と言うものであった。まだ当時空手界は戦後間もなくでお互いに肩を張った処も残っていた時代だったが我々は、そのルールをチェックする

までこともなく「早稲田が造られたものなら全てその結構です。」と言って決定した。場所は早稲田の道場、審判は**全て拓大の先輩方、後の日本空手協会中山最高師範、後の福井拓空会会長、全日本学連副会長**以下。一、早稲田は全盛時代で三段が4人もいて日本一を誇っていた。拓大も当時同じく全盛時代で三段が三人いて、早稲田側から空手史上最初の試合であり部員がエキサイトすることを避け主将同士は試合をやらずに副将とやらうと言う申しいで、早稲田は小森さん以下、慶應は三年の望月以下各15人であった。結果はたしか7対4、**早稲田の勝利**であった。これが文字通り**世界に於ける空手の試合制度の幕開け**である。そしてこの実現は、早慶両校の信頼と友情の賜物であった。

昭和31年になって、**学生連盟として試合制度を策定し全国的な規模で試合を実施しようという機運が急高**まってきた。主要各大学の大先輩方が協議を進め、直ぐに合意となり、具体化のはこびとなる。私も東大の石塚さんと、日大OBの若林さん(後の全空連専務理事)のお宅に何回かお邪魔し試合制度及び審判規定を作成した。次いでその規則を元に各大学のOB達が集まり、拓大監督だった入江さん達も加わり、学生部員達はそのルールで試合させいろいろ修正しながら完成させて行った。その間慶應では小幡、伊藤、高木、望月、釘等が積極的な役割を果たしたが特に伊藤俊太郎さんは一貫して推進をリードされた。

第一回全日本大学空手道選手権大会は32年秋、両国の日大講堂(戦前の相撲の国技館)で行われ、参加校確か29校、慶應は真鍋主将以下奮闘し、拓大も倒し、決勝で明治大と当たり惜しくも大将同士の決勝で破れ2位となった。その間、小別当君は全勝した。又、同じく**32年の6月には和道流のみによる第一回の試合**がおこなわれている。

45年46年と、和田光二君が2年連続して全日本学生個人選手権を獲得する快挙を遂げた、更に、46年第一世界選手権で見事優勝を成し遂げた事は記念に残る事であった。尚、上記試合の名称で、大学とは大学のチーム戦であり、学生とは、選手の個人戦のことである。その後下記の試合が加わることとなった。63年女子組手の団体、個人及び個人形で今日にいたっている。又、男子体重別個人戦も組手、形で行われている。又、学生連盟と全空連で昇段審査が行われるようになって既に30年を越すと思う。今日、全日本学連の試合参加校は260校で今昔の感がある。

審判規則の問題点

試合に於ける反則の審判の判定は現在4段階となっている。その第一段階は「忠告」であるがこれは、軽い当たりであればノーペナルティー、つまり罰則がないとする判定である。処が試合で「忠告」が出た場合、その**試合の結果は殆ど全てに近く当てた選手が勝ちを得ている**。これは技の差も無いとは言えないが、当てられれば選手は肉体的にも、精神的にもダメージを負うからである。学連の大半の審判は、学校によってはこの「忠告規則を意識して悪用していると考えている。若し、これが事実とすれば、その不公正と危害防止の不備は問題ある。私は2年前から学連の会議で三度この改善を提案し、当時の田辺理事長も全日本学連の理事会で協議することを席上で約束し、後に又、渡部さん、福井さん、若林さん、長島さん(早、拓、日、明のOB)に電話お話し皆さん良く理解されているが、現実には全空連とのルールに違いがでること、世界連盟(WKF)とも同問題がでる事、学連の選手が地区連の試合に出場する際ルールの差が試合をやり難くすること、全日本学連意見調整などなどで大変壁が厚い。以上、この問題の解決が課題である。

※ご指摘の全空連ルールと、学連のルールの違いが、平成25年4月よりWKFが、ルール改正に伴い全空連も改正、やっと念願の5人制審判になり、より学連ルールに近づいて来た、関西学空連を中心に全空連ルールを採用する方向に、全日本学空連も古川学連理事長により平成26年度(関西オープン)大会にテストケースで取り入れて行われる。27年度よりはより近い内容でWKFルールに準じると思われる。